

兵を用うるに言えること有り。吾れ敢えて主と為らずして客と為れ、敢えて寸を進まずして尺を退けと。是を、行くに道無く、攘うに臂無く、執るに兵無く、引くに敵無しと謂う。
禍いは敵を軽んずるより大なるは莫し。敵を軽んずれば、幾んど吾が宝を喪わん。故に兵を抗げて相い如けば、哀しむ者勝つ。

【大体の意味内容】用兵の極意として次のようなことが言える。「わが軍は攻勢に出ることなく、あえて受け身で防戦に徹せよ。わずかな進撃をするよりも大きく逃げろ。」と。

このことを、「道行に道無く、腕まくり腕無く、武力行使に武器無く、陽動するにも敵が不在」というのである。つまり、行軍するためには道が必要だがそれがないから進むことができない。そもそも腕がなければ「腕まくり」はできないし、武器がなければ武力を発揮することなどできるわけがない。わざと嘘の行動を見せつけて相手をだます「陽動作戦」を行っても、その敵がいなくなっていたら全く間拔けな場面になってしまう。要するに戦争するために必要な最低条件を、相手に与えてやらないことが、勝てないとしても決して負けないための最上の策なのである。

敵をバカにすることから招いてしまう禍ほど、大きな災難はほかにない。敵を侮れば、私の宝、すなわち「慈・儉・後」の三宝は失われてしまうであろう。だから戦場に布陣して、互いに互角の兵力であったなら、慈しみの心を以て、その殺し合いのめぐりあわせを哀しむ者のほうが、結局は勝つのである。

かつて「大東流合気柔術」という古武術を学んでいたことがあります。

身体からだの力を抜いて相手の力を利用し、攻撃してへる相手を投げたり、掌てのひらで触れるだけで相手

の全身を硬直カタ直させ動けなくしたり、そんな魔法の様な技をうへしも映画や動画で見っていました。が、自分で体感するまでは信じる気がなれません。

それで入門してみたのですが、「触れられるだけで全身硬直」の様な魔法は、結局体験できなかったのですが、今でもすべての技を信用してはいません。

ですが、「なるほど、う、ううなま」や藝術で見る技もうへつかあったのは事実です。

この武術の極意うへえは「力を抜く」ということです。

これが実に難しい、抜いたつもりでもどこかに力が入ってしまっているのです、本当には抜けません。

私はとにかく実感したかったので、先生に攻撃する役の時、本当に本気の力でねじ伏せようと攻撃しました。先生の腕をつかんで骨をへし折ろうとしたり、腰をつかんで投げ飛ばそうとしたら…すると驚いたことに、確かに自分の体が飛んでしまいました。

つかんだ時には鉄棒や木の幹だったものが、それを破壊しようとした瞬間に、タオルになってしまって、勢い余ってつんのめり、本当に体が吹っ飛んでしまうのです。

「本荘さんが、遠慮せずに本気を出してくれるから、かえって技がよくかかるとは」

と言われました。ほかのお弟子さんたちは、相手に、特に先生には遠慮して本気モードにはならないから、形だけの稽古けいこで投げたの投げられたりして、今一つお互いに実感できないし、技が深化しないというのでした。

「子どもや女性のような、力のない相手に攻撃されても技はかかりません。かかる必要のない相手には、かからないのです。」

だから私も、稽古の相手には「全力をお願いします。技がかかっていない場合は、投げられないでください」とお願いして稽古していました。

本当に力を抜くとは、一時的に死体になるのと同じです。

新米の山岳救助隊員が、重傷の人を背負って歩いている最中に、背中の人が死んでしまったら、その瞬間にもその重い重量を受けて転んでしまうそうです。それと同じ技が、合気柔術にもあります。敵に抱えあげられても、全身脱力してしまうことで相手を押しつぶしてしまいうのです。

このように、「心こころ身み脱だつ落らく」の極意うへえを、戦争にまで応用したのが、老子の兵法なのであります。

相手の陣が鉄壁だと思って全力で突進したところ、突っ込んだ瞬間に布切れになってしまったらつんのめってしまおうでしようし、ましてや戦う前から実は逃げられてもぬけの殻だったりしたら、気も抜けてしまおうでしよう。

巧妙に、相手に戦意を喪失じょうしつさせてしまおう。実に素晴らしい勝ち方です。